

発達障害のある子どもをもつ母親の育児困難感の軽減に関する質的研究—子どもへのスキンシップとグループワークを通して—

志田絹子¹⁾、松本京介²⁾

- 1) 新発田駅前複合施設イクネスしばた
- 2) 新潟医療福祉大学 社会福祉学科

【背景・目的】発達障害と診断される子どもの数が増加している。社会の理解や制度は整ってきたが、発達障害のある子どもやその家庭、特に母親を支える社会のしくみはまだ不十分であり、母親を支援する目的や具体的な支援方法について多方面からの検証が必要であると言われている。

また、スキンシップは人間の発達において重要であり、その効果も示されている。海外では発達障害のある子どもに対するスキンシップの効果が報告されているが、わが国では発達障害のある子どもにスキンシップをすることにより、その行動が改善したという報告はみられない。

そこで、本研究では、発達障害のある子どもをもつ母親の育児困難感を軽減させることを目指して、母親の子どもに対するスキンシップとグループを通じた関わりにおける母親の育児困難感の質的な変容プロセスについて検討することを目的とする。そして、母親が子どもとスキンシップをするときの抵抗感、スキンシップを継続していくために必要な要素、そして有効な支援について考察した。

【方法】研究協力者は、発達障害のある子どもをもつ母親6名であり、14回のグループワークと並行して母親による子どもへのスキンシップを実施し、グループワーク終了後、半構造化面接によるインタビューを行った。録音したデータは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)の手法で分析した。

【結果】分析テーマを「母親が子どもにスキンシップをするときの抵抗感を通して自己理解を深めるプロセス」とし、34の概念、11のサブカテゴリー、6のカテゴリーを生成した。

【考察】研究協力者である母親は世間を気にしすぎるあまり、子育てに困難を感じており、エネルギーが消耗し、『しんどい子育て』を経験してきた。母親はグループワークに参加することで、自分の感情に向き合い、それまで抑えていた気持ちを吐き出すことができた。そして、母親のなかに自分の感情を体験的に自覚したり、認識の変化が生じたりするなど、『他者との関わりによる変化』が起こった。また、母親は子どもへのスキンシップを通じた濃いコミュニケーションを体験するなかで、子どもに安心感を与えることができた一方で、子どもに対する怒りや嫉妬心を感じ、母親のなかにはそれを抑えるしんどさも生じた。母親は、

子どもへのスキンシップを通して、子どもに安心感を与えられない罪悪感や子どもへの抵抗感を自覚するなど、『子どもとの関係の再確認』をすることになった。

さらに、母親はグループワークの場で、我慢強く健気な自分の子ども時代や家族との関係を回想し、自身のいわば「内面の子(黒川、1996)」に気づいた。子どもへの抵抗感は母親自身の「内面の子」が引き起こす問題であることが考えられたが、母親はグループワークの場で、小林(2016)のいう情動的コミュニケーションを通して「内面の子」を自ら労い、『原家族・現在の家族の一員としてのふり返り』を行った。そして、母親はしんどいときには『必要な支援や場』を利用できるようになった。それは、道具的・情動的な支援を受けることだけでなく、グループワークの場で、母親が感じたことを言葉にしても、黙って涙を流していても、受け止めてもらえるような非言語的で保護的な場が提供されることでもあった。そのようなお互いの情動的コミュニケーションのなかで、やがて、母親は自分が安全基地にいるように感じられるようになった。そして、子どもが安心して過ごせる基地に自らがなろうと、『安全基地づくり』に着手するように変化していった。

以上のような母親の育児困難感の質的な変容と母親の自己理解が深まっていくプロセスが考えられた。

【結論】発達障害のある子どもをもつ母親の育児困難感を軽減させるには子どもへのスキンシップや情動的コミュニケーションが保障されたグループワークが有効であり、支援者側も自らの感性を磨く必要があると考えられる。